

2020 年度 後期 教養教育		日英区分 : 日本語
クラウド入門		
■ ■ 時間割コード	■ ■ ナンバリング	■ ■ 科目分野
LB2344	1000LB1AS00075	【教養教育】学びのリテラシー (2)
■ ■ 担当教員 (ローマ字表記)		
横山 重俊 [Shigetoshi Yokoyama]		
■ ■ 対象学生	■ ■ 対象年次	■ ■ 単位数
		2

#### ■ ■ 授業の目的

クラウドサービスの利用方法を身につける。

#### ■ ■ 授業の到達目標

クラウドサービスについてその成り立ちやその動作原理について語れる。  
クラウドサービスを使ったアプリケーション構築について理解する。

#### ■ ■ ディプロマポリシーとの関連 (評価の観点)

A : 諸科学についての基礎的知識と理解 ○  
B : 論理的・創造的思考力 ◎  
C : コミュニケーション能力 ◎  
D : 社会的倫理観・国際性 ○  
(◎ : 特に重視する, ○ : 重視する, △ : 評価対象, - : 評価対象としない)

#### ■ ■ 授業概要

我々が利用する機会が増えて来ているクラウドサービスについてその成り立ちやその動作原理について学ぶ。グループでのクラウドサービスを使ったアプリケーションの構築と発表を通じて、クラウドサービスの利用方法を身につける。コンピュータシステム、クラウド基盤の構築・運用の実務経験のある教員がそれらの経験をふまえた授業を展開する。

#### ■ ■ 授業の形式 (授業方法)

演習形式

#### ■ ■ 授業スケジュール

第1週 ガイダンス 演習環境設定  
第2週 Linux  
第3週 インターネット  
第4週 Webサービス  
第5週 クラウド  
第6週 クラウドコンピューティングの今後  
第7週 コンテナ技術  
第8週 コンテナ技術演習  
第9週 コンテナ技術を利用したアプリケーション開発演習(1)  
第10週 コンテナ技術を利用したアプリケーション開発演習(2)  
第11週 コンテナ技術を利用したアプリケーション開発演習(3)  
第12週 コンテナ技術を利用したアプリケーション開発演習(4)  
第13週 コンテナ技術を利用したアプリケーション開発演習(5)  
第14週 コンテナ技術を利用したアプリケーション開発演習(6)  
第15週 発表会

#### ■ ■ 授業時間外学習情報

※ 1 単位修得するためには、授業時間外の学修も含めて 4 5 時間の学修が必要です。

本学の学内規則で定める授業時間数は次のとおりです。

【講義・演習】 1 5 ~ 3 0 時間 (授業時間外 3 0 ~ 1 5 時間)  
【実験・実習・実技】 3 0 ~ 4 5 時間 (授業時間外 1 5 ~ 0 時間)

講義で配布した課題の演習 (小課題)

#### ■ ■ 成績評価基準 (授業評価方法)

課題提出、最終報告

#### ■ ■ 受講条件 (履修資格)

簡単なプログラム作成能力、インターネットを利用する能力を有すること。また、コンピュータシステムについての知識があることが望ましい。

#### ■ ■ メッセージ

情報技術の流れをとらえ (過去→現在)  
最先端に触れる (現在→未来)

#### ■ ■ キーワード

クラウド、仮想化、コンテナをキーワードに実務経験のある教員が講義を実施する。

#### ■ ■ この授業の基礎となる科目

コンピュータネットワークとセキュリティ

■ ■ 次に履修が望まれる科目

■ ■ 関連授業科目

■ ■ 教科書

■ ■ 参考書

■ ■ 教科書・参考書に関する補足情報

■ ■ コース管理システム (Moodle) へのリンク

<https://mdl2.media.gunma-u.ac.jp/course/view.php?id=437>

2020 年度 後期 教養教育		日英区分 :日本語
知っておきたい肺とアレルギーの話		
■ 時間割コード	■ ナンバリング	■ 科目分野
LB2210	1000LB1HS00018	【教養教育】健康科学科目群
■ 担当教員（ローマ字表記）		
久田 剛志 [Hisada Takeshi]		
■ 対象学生	■ 対象年次	■ 単位数
		2

#### ■ 授業の目的

肺は、酸素を取り込む臓器です。常に外界（周りの空気）と触れ合っているため、多くの病気がおこります。アレルギーを含めた呼吸器の疾患について、医療関係者のみならず、皆が知っておきたい肺とアレルギーの知識についてやさしく解説します。呼吸器を中心として、病気の成り立ちや予防法、治療法の基礎を理解し、今後の生活に役に立つ基本的な知識を身に付けることを目的とします。

#### ■ 授業の到達目標

教養教育の科目ですので、専門知識がなくても理解できるレベルです。以下を到達目標とします。

基本的な呼吸の仕組み、肺の働きについて説明できる。  
代表的な呼吸器疾患の成り立ちを説明できる。  
呼吸器疾患やアレルギー疾患の予防法や治療法の基本について説明できる。

#### ■ ディプロマポリシーとの関連（評価の観点）

- A：諸科学についての基礎的知識と理解 ○  
B：論理的・創造的思考力 ○  
C：コミュニケーション能力 -  
D：社会的倫理観・国際性 -

この科目を受講することによって、人体の巧妙な仕組みと各種疾患が発症するメカニズムを理解することはいろいろな学部専門教育にも通じるところがある。また、自己の健康管理にも役立つものである。

#### ■ 授業概要

呼吸機能について、また喫煙の健康への影響、呼吸器疾患とアレルギー（肺癌、結核、肺炎、睡眠時無呼吸症候群、喘息、花粉症など）をやさしく、予防法なども含めて解説します。（呼吸器疾患、アレルギー疾患、感染症に対する専門医である教員が、その実務経験を活かして授業を行います。）

#### ■ 授業の形式（授業方法）

プリントを配布し、講義形式。

#### ■ 授業スケジュール

- 第1回 肺の働き、呼吸の役割  
第2回 タバコの影響・・・軽いタバコならいいのでしょうか？ 新型タバコは？  
第3回 タバコ病である肺気腫（COPD）を知り、あとで後悔しないようにしましょう  
第4回 肺がんを知り、予防に心がけよう  
第5回 睡眠中に息がとまっていませんか？ 睡眠時無呼吸症候群  
第6回 結核、なぜマスクミで騒がれたのでしょうか？  
第7回 まとめ①  
第8回 肺炎・インフルエンザ 超高齢社会において  
第9回 アレルギーは、どうしておこるのでしょうか？  
第10回 喘息はなぜおこるのでしょうか？ 予防と治療は？  
第11回 花粉症を何とかするには？  
第12回 鳥の飼い主などを襲う息苦しい病気 - 過敏性肺炎  
第13回 環境や職業によっておこる肺の病気？  
第14回 食事による病気の予防！ 呼吸器疾患やアレルギーにも・・・  
第15回 呼吸リハビリテーション  
第16回 試験

※ 予定が変更になる場合には、随時連絡します。

#### ■ 授業時間外学習情報

※ 1単位修得するためには、授業時間外の学修も含めて45時間の学修が必要です。

本学の学内規則で定める授業時間数は次のとおりです。

【講義・演習】15～30時間（授業時間外30～15時間）

【実験・実習・実技】30～45時間（授業時間外15～0時間）

教科書は必要ない。毎回プリントを配布する。よく復習し、知識を確実なものにして欲しい。試験は記述式であり、プリント内容を理解していれば解答できる。

#### ■ 成績評価基準（授業評価方法）

試験にて評価する。成績評価は、S(90-100点)、A(80-89点)、B(70-79点)、C(60-69点)、D(59点以下)とし、S、A、B、Cを合格、Dを不合格とする。ただし、Sは上位5%以内とする。

#### ■ 受講条件（履修資格）

全学部生

#### ■ メッセージ

肺の病気は、年齢を問わず発症し、様々なものがあります。病気の本質とその予防法を理解し、健康な生活を送れるように努めましょう。新しい話題も随時取り入れてやさしく解説します。

#### ■ キーワード

肺 呼吸器 喫煙 肺がん 結核 アレルギー 喘息 睡眠時無呼吸症候群  $\omega$ 3 脂肪酸 実務経験

#### ■ この授業の基礎となる科目

特になし

#### ■ 次に履修が望まれる科目

特になし

#### ■ 関連授業科目

特になし

#### ■ 教科書

#### ■ 参考書

#### ■ 教科書・参考書に関する補足情報

特になし

#### ■ コース管理システム (Moodle) へのリンク

## がん予防・治療・ケア

■ ■ 時間割コード	■ ■ ナンバリング	■ ■ 科目分野
LB2437	1000LB1HS00002	【教養教育】健康科学科目群
■ ■ 担当教員（ローマ字表記）		
二渡 玉江 [Futawatari Tamae]		
■ ■ 対象学生	■ ■ 対象年次	■ ■ 単位数
		2

## ■ ■ 授業の目的

がん予防・治療・ケアについての知識を深め、自分および身近な周囲の人の医療行動に役立てることを目的とする。

## ■ ■ 授業の到達目標

1. 日本や群馬県におけるがん対策について概説できる。
2. がんの疫学・がん予防に必要な生活習慣を述べることができる。
3. がん3大治療である手術療法、がん薬物療法、放射線療法を概説できる。
4. 3大治療に伴うケアの方法を述べることができる。
5. がん治療における意思決定支援の必要性を述べることができる。
6. 緩和ケアの概念の変遷から必要性を述べることができる。
7. がん看護における家族ケアの必要性と方法を概説できる。
8. がん看護専門職の役割と活動の実際について概説できる。
9. がんや治療に伴う様々なストレスを緩和する方法について概説できる。

## ■ ■ ディプロマポリシーとの関連（評価の観点）

- A：諸科学についての基礎的知識と理解 ○  
 B：論理的・創造的思考力 ◎  
 C：コミュニケーション能力 ○  
 D：社会的倫理観・国際性 ○

## ■ ■ 授業概要

本科目は、医師、看護師の実務経験のある教員が、実務経験を活かして授業を行う。  
 がん医療の動向、がん医療をめぐる一次・二次・三次予防の意味を知る。がん発病にいたるメカニズムと主な治療を理解し、がんを予防するための生活習慣について学ぶ。また、がんの早期発見のための検診や自己チェックの方法について理解を深める。それをもとに自分自身の生活を振り返りがんを予防する生活習慣を獲得できるような動機付けとする。  
 さらに治療選択における患者と医師・看護師との関わり、抗がん剤・放射線を受ける患者の症状マネジメント、手術を受けた患者の身体・心理的变化を知り、がん治療におけるセルフマネジメントのあり方を考える。さらに終末期における医療を受ける場、緩和ケア・ホスピスケアについての知識を深め、がん医療・ケアについて考える。

## ■ ■ 授業の形式（授業方法）

講義・一部演習形式

## ■ ■ 授業スケジュール

No.	内容
第1回	がんの疫学、がん医療をめぐる国・県の政策について学ぶ。 10/1 二渡
第2回	がん発症メカニズムについて学ぶ。 10/8 小澤厚志
第3回	がんの診断、検査について学ぶ。 10/15 小澤厚志
第4回	がん予防のための生活習慣について学ぶ。 10/22 二渡玉江
第5回	がん治療、抗がん薬治療とケアについて学ぶ。 10/29 渡邊 恵
第6回	がん治療、放射線治療（有害事象含む）とケアについて学ぶ。 11/5 北田陽子
第7回	がん治療の意思決定について考える。 11/12 二渡玉江
第8回	外科治療を受けた患者の身体・心理的变化について学ぶ。 11/19 二渡玉江
第9回	がん治療に伴うボディイメージの変容とケアについて学ぶ。 11/26 二渡玉江
第10回	がんに伴うストレスを緩和し免疫を高める方法を学ぶ。 12/3 近藤由香
第11回	がん看護専門看護師（CNS）の役割と活動の実際を学ぶ。 12/10 角田明美
第12回	群馬大学医学部保健学科における市民向けがん医療・ケアの取り組みを学ぶ。 12/17 二渡玉江

第13回	終末期にあるがん患者と家族のケアについて学ぶ。 12/24 京田亜由美
第14回	緩和ケア・ホスピスケアについて学ぶ。 1/7 金子結花
第15回	まとめ レポート提出 1/21 二渡玉江

#### ■ 授業時間外学習情報

※ 1単位修得するためには、授業時間外の学修も含めて45時間の学修が必要です。

本学の学内規則で定める授業時間数は次のとおりです。

【講義・演習】15～30時間（授業時間外30～15時間）

【実験・実習・実技】30～45時間（授業時間外15～0時間）

講義中に課題を提示する。復習を行いレポートを作成すること。  
自己の考えが述べられているレポートを期待します。

#### ■ 成績評価基準（授業評価方法）

レポート（100点）

なお、2/3以上出席しないと最終試験であるレポートを提出することはできない。

#### ■ 受講条件（履修資格）

特になし

#### ■ メッセージ

積極的な質問を歓迎します。

#### ■ キーワード

がん予防、セルフケア、治療、緩和ケア、実務経験

#### ■ この授業の基礎となる科目

特になし

#### ■ 次に履修が望まれる科目

特になし

#### ■ 関連授業科目

特になし

#### ■ 教科書

#### ■ 参考書

#### ■ 教科書・参考書に関する補足情報

なし

#### ■ コース管理システム（Moodle）へのリンク

2020 年度 前期 教養教育		日英区分 :日本語
<b>生態系と環境</b>		
■ ■ 時間割コード	■ ■ ナンバリング	■ ■ 科目分野
LB1276	1000LB1NS00026	【教養教育】自然科学科目群
■ ■ 担当教員（ローマ字表記）		
西村 尚之 [Nishimura Naoyuki]		
■ ■ 対象学生	■ ■ 対象年次	■ ■ 単位数
		2

#### ■ ■ 授業の目的

現代の様々な環境問題、特に、生物との関わりが深い問題を理解するためには、生態学の知識が重要である。生態学は自然界における生物の生命活動をその生物群を取り巻く環境と関連させて学問する生物学の1分野である。そこで、本講義では、同種個体の集まりである個体群や異種個体群で形成された生物群集の特徴を理解し、これらの生物集団と環境との相互作用系である生態系に関する正しい認識から私たち人間の生存にかかわる自然界で起こる課題について説明できるようになることを目的とする

#### ■ ■ 授業の到達目標

生物個体、個体群、群集とはどのようなものか具体的にイメージできる。  
生物間相互作用と群集の成り立ちや機能について考察できる。  
生態系と人間環境との関係を正しく理解できる。

#### ■ ■ ディプロマポリシーとの関連（評価の観点）

A：諸科学についての基礎的知識と理解 ◎  
B：論理的・創造的思考力 ○  
C：コミュニケーション能力 -  
D：社会的倫理観・国際性 △  
（◎：特に重視する ○：重視する △：評価対象 -：評価対象としない）

#### ■ ■ 授業概要

自然界の生物は、何らかの形で集団を成して生育している。自然界における生物の存在は、個体、個体群、群集などといったさまざまなレベルで観察される。そのような生命現象には普遍的な性質が存在し、一方、生命体のすがただけでなく生命体の演ずる現象もまた多様である。これらを具体的にイメージして理解することは難しい。そこで、このような生物圏に関する知識を科学的に理解するために、生態学の基礎に立ち、実際の科学的なデータを取り上げながら、講義を行う。なお、本講義は環境アセスメント・環境政策・農林業普及教育の実務経験のある教員が、その実務経験を活かして、生物環境の授業を行う。

#### ■ ■ 授業の形式（授業方法）

今年度はスケジュール・評価方法が変更になります。このシラバス内の学生用連絡先のリンクをクリックしてください。

通常の講義形式であるが、生物現象について理解するためには視覚的な教材も必要である。そのため、スライドやビデオなども活用する。

#### ■ ■ 授業スケジュール

今年度はスケジュール・評価方法が変更になります。このシラバス内の学生用連絡先のリンクをクリックしてください。

- 第1回 ガイダンス：履修上の注意と本講義の内容（生物学の中の生態学）
- 第2回 生態系と自然環境：生命の共通性と地球上での生物の存在
- 第3回 生物種の分類と種数：地球上に存在する生物種数と進化
- 第4回 生物集団の特徴：生物と環境要因、および生物個体群の特徴
- 第5回 生態系の成り立ち1：生物群集と生態系の安定性
- 第6回 生態系の成り立ち2：生態系における物質生産の役割
- 第7回 生態系の成り立ち3：生態系における物質循環の役割
- 第8回 個体群の成長過程：生物増殖（出生と死亡）のモデル（指数モデルとロジスティックモデル）
- 第9回 生物間の相互作用：種間の競争排除の原理とニッチ（生態的地位）とすみわけ
- 第10回 生物進化と生存戦略：自然選択と様々な生活史戦略
- 第11回 世界のバイオーム（生物群系）：生物集団の地理的分布と地球上の様々な生態系
- 第12回 日本の植生：日本の森林生態系の成立条件とその特徴
- 第13回 植生の遷移と森林の維持機構：生態系の変化と植物群集の移り変わりの仕組み
- 第14回 生物多様性と生態系：生物多様性とは（種多様性の指標と生態系の機能・サービス）
- 第15回 まとめ（生物圏と地球環境）：生態系保全に必要なことは何か？

#### ■ ■ 授業時間外学習情報

※1単位修得するためには、授業時間外の学修も含めて45時間の学修が必要です。

本学の学内規則で定める授業時間数は次のとおりです。

【講義・演習】15～30時間（授業時間外30～15時間）

【実験・実習・実技】30～45時間（授業時間外15～0時間）

指定された教科書の予習と復習

#### ■ ■ 成績評価基準（授業評価方法）

課題（30%）、学期末の筆記試験（70%）により評価する。筆記試験は100点満点の問題を出題し、評価には各自のこの筆記試験の素点×0.7とした点数を使用します。課題や試験の評価基準は、生物個体、個体群、群集を具体的に説明でき、かつ、生物間相互作用と群集の成り立ちや機能を理解して、生態系と人間環境との関係を考察できるレベルを判定して、これらを総合的に判断して最終成績を決定する。

今年度はスケジュール・評価方法が変更になります。このシラバス内の学生用連絡先のリンクをクリックしてください。

## ■ 受講条件（履修資格）

生物に興味があること。

## ■ メッセージ

出席回数が全講義（15回）の3分の2以上の場合に限り筆記試験の受験を認める。特別な理由がなく、自己都合により第1回目ガイダンスかつ第2回目の講義を受講しないものには履修を認めない場合がある。出席や課題などにおいて規律違反をした学生には絶対に履修を認めない。また、許可無く講義中のパソコンやタブレット・スマートホン・携帯電話の使用を認めない。

## ■ キーワード

生態学、生物群集、個体群、生態系、生物圏、生物多様性、実務経験

## ■ この授業の基礎となる科目

特になし

## ■ 次に履修が望まれる科目

特になし

## ■ 関連授業科目

特になし

## ■ 教科書

教科書1	ISBN	9784320057869				
	書名	大学生のための生態学入門				
	著者名	原 登志彦(監修)・西村 尚之(著)	出版社	共立出版	出版年	2017
	備考	必ず購入すること				

## ■ 参考書

## ■ 教科書・参考書に関する補足情報

## ■ コース管理システム（Moodle）へのリンク



2020 年度 後期 教養教育		日英区分 : 日本語
文化人類学		
■ ■ 時間割コード	■ ■ ナンバリング	■ ■ 科目分野
LB2366	1000LB1SS00015	【教養教育】社会科学科目群
■ ■ 担当教員（ローマ字表記）		
志村 真幸 [Masaki Shimura]		
■ ■ 対象学生	■ ■ 対象年次	■ ■ 単位数
		2

#### ■ ■ 授業の目的

日本や欧米諸国とはまったく異なった生き方をしているひとびとが、アジア、アフリカ、オセアニア、中南米などに大勢いることを理解し、さらにそこから自分たち自身の思考や生活を客観的に説明できるようになることをめざす。

#### ■ ■ 授業の到達目標

自分とはまったく異なった価値観を、許容・理解できるようになる。

#### ■ ■ ディプロマポリシーとの関連（評価の観点）

- A：諸科学についての基礎的知識と理解 ○  
 B：論理的・創造的思考力 ◎  
 C：コミュニケーション能力 ○  
 D：社会的倫理観・国際性 ◎  
 ○：特に重視する ○：重視する △：評価対象 -：評価対象としない

#### ■ ■ 授業概要

- ①文化人類学という学問の扱う対象と目的について、現代的な意義をふまえたうえで講義する。  
 ②19世紀における人類学の発生から、社会進化論、機能主義、文化相対主義へと至る歴史を概説する。  
 ③本講義では、とくに日本/西欧世界と他地域（アジア、アフリカ、オセアニア等）の関係に重点を置く。  
 ④最終的には、グローバル化する現代社会における文化の問題を受講者に理解してもらうことをめざす。  
 博物館での展示企画や、学生/市民向け実習の実務経験のある教員が、その実務経験を生かして、フィールドワークの授業を行なう。

#### ■ ■ 授業の形式（授業方法）

原則として、講義形式で行なう。  
 そのほか数回のフィールドワークを予定している。学生でグループを組み、それぞれ学外で実施する。

#### ■ ■ 授業スケジュール

- 第1回 文化人類学とは何か  
 第2回 文化人類学の方法  
 第3回 食  
 第4回 衣  
 第5回 住まいと家族  
 第6回 民族と心理  
 第6回 科学・技術の人類学  
 第7回 医療人類学  
 第8回 宗教、動物、魂  
 第9回 環境と公害  
 第10回 スポーツとあそび  
 第11回 観察と実践  
 第12回 フィールドワークとは何か  
 第13回 模擬フィールドワーク  
 第14回 模擬フィールドワーク  
 第15回 現代社会における文化人類学の役割

#### ■ ■ 授業時間外学習情報

※1単位修得するためには、授業時間外の学修も含めて45時間の学修が必要です。

本学の学内規則で定める授業時間数は次のとおりです。

- 【講義・演習】15～30時間（授業時間外30～15時間）  
 【実験・実習・実技】30～45時間（授業時間外15～0時間）

授業内で示す参考書やサイトなどによる予習・復習が望ましい。  
 また、フィールドワークは、時間外の実習となる可能性がある。

#### ■ ■ 成績評価基準（授業評価方法）

- ・授業内提出物（課題への回答など）：30%
- ・フィールドワークの報告：30%
- ・最終レポート：40%

#### ■ ■ 受講条件（履修資格）

特になし。

#### ■ ■ メッセージ

文化人類学という学問を通して、自分たちとは異なる文化・生活・習慣・考え方もつひとつとびとびに対して、理解を深めていってほしいと思います。  
 なお、受講に際しては私語、携帯電話操作等、他人の迷惑となる行為を禁じます。

■ ■ キーワード

フィールドワーク、文化相対主義、生と死、実務経験

■ ■ この授業の基礎となる科目

■ ■ 次に履修が望まれる科目

■ ■ 関連授業科目

■ ■ 教科書

■ ■ 参考書

備考	授業内に指示する。
----	-----------

■ ■ 教科書・参考書に関する補足情報

■ ■ コース管理システム (Moodle) へのリンク

2020 年度 後期 教養教育		日英区分 : 日本語
<b>比較芸術論</b>		
■ ■ 時間割コード	■ ■ ナンバリング	■ ■ 科目分野
LB2325	1000LB1HU00048	【教養教育】人文科学科目群
■ ■ 担当教員（ローマ字表記）		
菅生 千穂 [Sugo Chiho], 林 耕史 [Hayashi Koshi]		
■ ■ 対象学生	■ ■ 対象年次	■ ■ 単位数
		2

#### ■ ■ 授業の目的

音楽、美術などの芸術は、それぞれの文化的歴史的背景の前に多様な姿を示しているが本講義では、音楽を中心にいくつかの作品を抽出し、美術分野からの視点を含む多様でユニークな観点で比較考察することで、それらの芸術的特質について分析を試みる。講義やディスカッション等を通して、学生の持つ芸術への興味が深まり、柔軟な視点や考え方を養成することを目的とする。

#### ■ ■ 授業の到達目標

音楽や美術、芸術にこれまで以上の興味・関心を持つようになる。  
既知・既成の概念にとらわれず、これまでと違った芸術や文化への視点を持つことができる。

#### ■ ■ ディプロマポリシーとの関連（評価の観点）

- A：諸科学についての基礎的知識と理解 ○  
B：論理的・創造的思考力 ◎  
C：コミュニケーション能力 ◎  
D：社会的倫理観・国際性 ○

#### ■ ■ 授業概要

音楽、美術など古今東西の芸術は、それぞれの文化的歴史的背景の前に多様な姿を示している。楽曲や美術作品など、ひとつのものに注目するのみではなく、いくつかの窓口を通して視聴比較することで、それらの特徴や魅力が浮き彫りになる。本講義では、古今東西の芸術から音楽を中心にいくつかの作品を抽出し、独自の観点で比較考察することで、それらの芸術的特質について分析を試みる。なお、各講義においてリフレクション・ペーパーを提出し、学期中1～2回のレポートを課す。

（音楽演奏家としての実務経験のある音楽教員と、彫刻家・美術教育家としての実務経験のある美術教員による各分野からの視点を生かした比較芸術を試みる授業をおこなう）

#### ■ ■ 授業の形式（授業方法）

講義形式、グループでの対話・討論を含む

#### ■ ■ 授業スケジュール

実務経験のある2名の教員による複数授業（全回）

- ① ガイダンス～音楽と美術
- ② 音楽、美術、その今と昔
- ③ 20・21世紀と19世紀の音楽、美術
- ④ 東洋と西洋の音楽、美術
- ⑤ 北半球と南半球の音楽、美術の比較
- ⑥ 音楽における「数」の違いによる比較
- ⑦ 音楽における「拍子」などの違いによる比較
- ⑧ 音楽の「調性」の違いによる比較
- ⑨ 同曲異演の比較（1）～楽器、演奏形態の違い
- ⑩ 同曲異演の比較（2）～演奏者の違い
- ⑪ 同曲異演の比較（3）～同一演奏者のなかみられる違い
- ⑫ 印象派における音楽、美術
- ⑬ 国策としての音楽、美術
- ⑭ 現代アートとしての音楽と美術
- ⑮ これからの音楽と美術

#### ■ ■ 授業時間外学習情報

※ 1単位修得するためには、授業時間外の学修も含めて45時間の学修が必要です。

本学の学内規則で定める授業時間数は次のとおりです。

【講義・演習】15～30時間（授業時間外30～15時間）

【実験・実習・実技】30～45時間（授業時間外15～0時間）

#### ■ ■ 成績評価基準（授業評価方法）

配分は、平常の授業への参加度、大小レポートを40点、30点、30点として行う。

成績評価は、S(90～100点)、A(80～89点)、B(70～79点)、C(60～69点)、D(59点以下)とし、S、A、B、Cを合格、Dを不合格とする

#### ■ ■ 受講条件（履修資格）

特になし

#### ■ ■ メッセージ

#### ■ ■ キーワード

芸術、音楽、美術、比較、楽曲、作品、様式、芸術史、実務経験

■ ■ この授業の基礎となる科目

■ ■ 次に履修が望まれる科目

■ ■ 関連授業科目

■ ■ 教科書

■ ■ 参考書

■ ■ 教科書・参考書に関する補足情報

■ ■ コース管理システム (Moodle) へのリンク

2020 年度 前期 教養教育		日英区分 : 日本語
生命保険の仕組みと活用を考える		
■ ■ 時間割コード	■ ■ ナンバリング	■ ■ 科目分野
LB1279	1000LB1IS00071	【教養教育】総合科目群
■ ■ 担当教員（ローマ字表記）		
杉山 学 [Sugiyama Manabu], 荒木 孝志 [Takashi Araki]		
■ ■ 対象学生	■ ■ 対象年次	■ ■ 単位数
		2

#### ■ ■ 授業の目的

社会保障制度の仕組みや自助努力で将来に備えることの重要性を理解し、リスクを回避・抑制する手段の一つである生命保険の仕組み・役割等について学ぶことを通じて、これからの持続可能な社会を営む一員として役に立つ知識・考え方の習得を目指す。

#### ■ ■ 授業の到達目標

社会保障制度の概要やその主な保障内容を理解し、説明することが出来る。  
現代生活に潜むリスク、生命保険の意義・役割、基本的な仕組み等を理解し、説明することが出来る。  
大学生として、公的保障と私的保障のあるべき姿について、自分なりの考察を加えて整理し、説明することが出来る。

#### ■ ■ ディプロマポリシーとの関連（評価の観点）

- A：諸科学についての基礎的知識と理解 ○  
B：論理的・創造的思考力 ○  
C：コミュニケーション能力 ○  
D：社会的倫理観・国際性 ○

#### ■ ■ 授業概要

この授業では、まず私たちを取り巻く経済環境について概観する。  
その理解の上で立ち、少子高齢化社会の一層の進展により、表面化している社会保障制度の諸課題を背景に、公的保障と私的保障の多様なあり方や、私的保障（生命保険）の意義、自助努力の必要性や有用性について理解し、考察を深めていく。  
また、グループ単位で課題分析・解決策等を議論し、提言としてまとめあげるグループディスカッションも予定している。  
全ての講義において、大手生命保険会社の役員・管理職等を歴任し、生命保険事業全般に深く精通した幅広い知識・経験・実績を有する講師陣が担当する。  
経験談や最新の情報提供も随所に織り込み、理論と実践の両面から理解を深めていく。

#### ■ ■ 授業の形式（授業方法）

講義と演習（グループディスカッション）。  
演習（グループディスカッション）は2回程度、少人数に分かれて与えられたテーマに対する解決策の議論等を行う。

#### ■ ■ 授業スケジュール

- 1：オリエンテーション・生保総論
- 2：生活設計とリスク管理①
- 3：生活設計とリスク管理②
- 4：公的保障と生保（死亡・医療）
- 5：公的保障と生保（老後・介護）
- 6：生保契約の仕組み
- 7：グループディスカッション
- 8：生保商品の変遷・動向
- 9：生保に関する調査
- 10：生保会社の組織・業務
- 11：隣接業界（少額短期保険等）
- 12：震災対応
- 13：金融ADR
- 14：グループディスカッション
- 15：総括

※受講生の理解度や履修人数によっては、内容・順番を見直す場合があります。

#### ■ ■ 授業時間外学習情報

※1単位修得するためには、授業時間外の学修も含めて45時間の学修が必要です。

本学の学内規則で定める授業時間数は次のとおりです。

【講義・演習】15～30時間（授業時間外30～15時間）

【実験・実習・実技】30～45時間（授業時間外15～0時間）

授業で使用した資料に基づいて一時間程度の復習を行うことが、内容理解において望ましいと考えます。

#### ■ ■ 成績評価基準（授業評価方法）

「授業への参加度+（受講回によって実施）小レポート等の内容」60%  
「最終試験得点」40%で評価します。

最終試験は学期末に実施します。下記の観点から評価を行います。

- ・社会保障制度の概要の理解
- ・生命保険の意義・役割・仕組み等の理解

小レポート、グループディスカッションでは、課題に対して自分なりにどのように考察し、それを説明できているかを評価します。

#### ■ ■ 受講条件（履修資格）

#### ■ ■ メッセージ

少子高齢化の進展を踏まえた社会保障制度の改革状況について、メディア等を通じて情報収集し、課題認識の向上を図ると、より講義が楽しく理解できるようになると考えます。その上で、生活設計・生命保険について学ぶことは、それぞれの人生について考える大変有益な機会にもなると考えます。

#### ■ キーワード

公的保障と私的保障  
公助と自助  
生活設計  
リスク管理  
実務経験

#### ■ この授業の基礎となる科目

#### ■ 次に履修が望まれる科目

#### ■ 関連授業科目

#### ■ 教科書

#### ■ 参考書

#### ■ 教科書・参考書に関する補足情報

毎回の講義時に資料を配布する。

#### ■ コース管理システム (Moodle) へのリンク